

## 痴呆老人の徘徊行動と看護援助に関する研究

川島 和代 水上 稔 山崎 松美\* 瀬戸 尚子\*\*  
秋田和賀子\*\* 大場 幸子\*\* 石井あかね\*\*

## KEY WORDS

wandering behaviors, nursing care, senile dementia patients,  
geriatric health services facility

## はじめに

加速度的なスピードで高齢社会を迎え、我が国の痴呆老人の数は、1995年現在で約123万人と推計されている。池田<sup>1)</sup>は老年痴呆の治療・予防は十分行っておらず、人口の高齢化とともに老年痴呆患者も増加している現在、老年痴呆患者の介護は医学上のみならず、大きな社会問題と述べている。痴呆老人の問題行動の中で徘徊は最も頻度が高く、介護者の心身の負担を増やすだけでなく患者自身にもさまざまな危険をもたらすものである。しかし、一般には徘徊に関する介護者の知識は充分とは言えず、適切に対処されていないのが現状である。また、徘徊とは、以前は目的もなくただ歩き回ることとされていたが、現在では多くの場合、徘徊は介護者からみた言葉であり、患者自身には目的を持った行動である<sup>1)</sup>と指摘されており、徘徊行動の詳細な観察の必要性が示唆される。本研究の目的は施設入所中の痴呆老人の徘徊行動を観察し、徘徊行動の特徴を明らかにし、より質の高い看護援助を考察することである。

## 方 法

1. 対象：石川県内のN老人保健施設の痴呆棟に入所し、施設職員より徘徊行動を指摘された痴呆老人4名である。徘徊者の選定にはAlgase<sup>2)</sup>と小泉<sup>3)</sup>らの研究で用いた徘徊者の基準 a. 頻繁に歩行又は歩き回る, b. 過活動または特定の作業を続ける, c. 施設の日課と異なる場所・時間帯に行動する, d. 繰り返し離棟する, または試みようとする, e. 他の入所者や施設のプライベート・スペースに侵入

する, f. 他の入所者や職員の後をつけ回して施設の中を動き回る, の6項目より2項目以上該当することを条件とした。

2. 研究方法：5泊6日昼夜連続127時間、研究者が3交代で参加観察を行った。観察内容は、対象の徘徊の時間帯、経路、言動、他者とのかかわりの状況、行われている看護・介護、観察者の感想を記述した。対象の今までの生育歴や生活習慣、痴呆発症までの経緯などの生活過程は、家族にインタビューし詳細に把握した。対象の1徘徊行動単位毎（歩行開始から終了まで）にカードに起こし、経路を図示し、経過の特徴を記入した。

3. 分析方法：観察にかかわった研究者複数で、痴呆性老人個々の徘徊行動をカードをもとに老人の生活過程との関連性を検討し、老人側の認識に焦点を当てた分類を行った。

4. 倫理的配慮：本研究を進めるに際し対象の家族に研究の主旨を説明し了解を得た。

## 結 果

## 1. 対象の背景（表1）：

対象の背景と痴呆に至った経緯は表1に示す通りである。痴呆に至る過程をみると、4事例全員が老いてから配偶者との離・死別、一人暮らしを経験しており、さらにN老人保健施設入所前に入院・入所といった環境の変化を体験していることがわかった。徘徊行動を1単位毎にカード化した4事例の総数は、観察期間中243枚にのぼった。

## 2. 徘徊行動の特徴（表2）：

A・D氏のように高度な痴呆老人ほど頻回あるいは

表1. 対象の背景と痴呆に至った経緯

対象	年齢	性別	痴呆度※	元の職業	痴呆に至った経緯
A	86歳	男	4点	農業 村会議員 農協長 (婿養子)	73歳の時に妻死亡、以来1人暮らし。高血圧、動脈硬化症、心不全が出現。物忘れすすみ田舎から金沢市のケアハウスへ移る。その後N施設へ移るも痴呆症状徐々に進行。
B	84歳	女	3点	製材所 機械り 内職	82歳より夫が入退院繰り返し、1人暮らしの状態。慢性心不全、一過性脳虚血発作にて倒れ、入院。入院中、夜間不穏強くなり、強制退院となる。この時に、老年痴呆と診断。
C	87歳	女	4点	製紙工場 40代～ 74歳ま で働く	67歳より1人暮らし。80歳頃より被害妄想・幻聴あられ、4男と同居。子宮脱にて入院・手術。痴呆症状・精神障害強くなる。退院後4男入院したため、子供の家を転々とする。
D	88歳	女	4点	主婦	次男家族と中途で別居し、67歳より1人暮らし。孫の成長とともに家族の訪問回数減る。次第に被害妄想出現。82歳時、階段より転落し大腿骨骨折し入院。安静を強いられている内に徐々に痴呆症状すすむ。

※ 痴呆度は老人ぼけの臨床判定基準（柄澤）で表す。

長時間の徘徊行動が見られた。また、A・C・D氏のように他の部屋に入ったり、ベッドやイスに座り込むなど他者に迷惑が及ぶ状況が生じることもわかった。しかし、対象の生活過程を押さえながら検討したところ、他人には理解しがたい歩行でも理由を問いただけると、「家へ帰る。」とか「晩御飯用意してない。」などかつての生活を彷彿させる表現がみられた。

A氏を例としてみると全体を通して落ち着かない様子が見られ、洗面所横や特定の女性高齢者のイスによく座るので、A氏にとって居心地の良い場所と判断した。頻回な移動は落ち着く場所を探している行為と映った。徘徊中の言動には、議員、婿養子だったA氏の生活過程とつながっているものがみられた。

### 3. 徘徊場面の代表例と分析過程（表3）：

4事例の徘徊場面のカードより代表的なものを抽出し、その意味をとりだした分析過程を示したものが表3である。事例Aでは好んですわっていた椅子が女性老人Mさんのものであったため椅子を交換されたのだが、怒って廊下の端まで歩きさらにサービ

表2. 対象の徘徊行動の特徴

対象	時間	経路	行動	言動
A	日中にみられるが規則性はない。	イスからイス、イスからベッドへの移動が主にみられる。サービスステーション(以下SS)のまわりを一定方向に回る。	頻回な移動。洗面所横や特定の女性高齢者のイスに固執。体操やリハビリ中、参加意欲なく何回も立とうとする。	どこに行くのか尋ねると「家へ行く」「折戸(出生地)へ行く」と。現在起こっていないことを、今自分に起こっているかのように突然話出す「当選した」「この木切ってもいいんか」
B	午後から就寝までにみられる。入浴日に多くみられる。	自室に向かうことが多い。その際、経路に規則性はない。	歩行の際、各部屋(トイレも含む)をのぞく。自室では布団を触ったり畳む行動が多い。	会話は成り立つが、この場に存在しない人名、物が出てくるなど辻褃があわない。
C	転落防止のため車椅子に抑制されており、抑制帯が外された時に必ず動く。夜間も稀にみられる。	他室に入ったり、廊下(SSのまわり)を回ったりする。規則性はない。	掃除をするような仕草がみられる。膝が痛く、這うことが多い。	どこへ行くのか尋ねると「家へ行く」「晩御飯何も用意してない」「山科(自宅)」「西金沢(職場)」など返ってくる。会話は成り立つが行動と言動不一致。
D	午前中のトイレ後、昼食後に主にみられる。一回の歩行時間は長く、一時間に及ぶことあり。	規則性はなく、目についたものに向かって歩く。他の入所者の部屋に入り、ベッドに座って休む姿もみられる。	指さし行為、顔や服を触る、ゴミを払う仕草、部屋をのぞく、窓を開けようとする、ベッドの見回りの歩行などが多くみられる。	「らーらーらー」と歌っている時が多い。話しかけに対して単語をオウム返しにする、笑いかけるとが多いが、出入り口で、「かたい」「出れん」「開かん」の自発語もあり。

表 3. 徘徊場所の代表例と分析過程

対象	徘徊場面	その意味	徘徊行動の命名
A	好んですわっていたMさんの衣を交換され怒る。席をたつて廊下の端まで歩き、その後「ステーション（以下SS）を一周する。自室に戻り、布団を直し、すぐ出てくる。その後20分間に3回立ったりすわったりをくり返す。	自分のなじみの場を追われた不快感情を安定させるために頻回に歩行すると考えられた。	感情安定のための歩行 目的達成のための歩行 結果としての長時間歩行
B	夕食前、看護者に衣にすわらされたが、すくっと立ち上がって各部屋を覗く。どうしたのかと問いかけると「今、ちょっとうちの方へ・・・」と言う。各部屋の入り口のネームプレートを見ながら歩いている。	自分の意志とは異なる扱いをされたが、自分の過去の生活とつながって落ち着き場所を探すという認識での探索行動と考えられた。	
C	転倒予防用（変形性膝関節症あり）の抑制帯を外されると、車椅子から立ち上がり、床を四つ這いになって歩く。何をしているのか問いかけると「晩御飯何も用意してこなかった。」「職場に行かなだめや。」と話す。連れ戻されるまで床を這っている。	自分で動けなかった肉体的な苦痛から解放され、過去の記憶につながった認識で食事の世話行為や仕事をしはじめたと考えられた。	
D	体重測定後、自室（4人部屋）に入り、他者の「ベッド」のゴミを払う、窓を開ける、枕カバーを直す、他室で「ベッド」の柵を外してすわる、絵を眺める、洗面所で鏡を見るなど人とぶつかるまで約40分間歩く。	寝床を整えようとする世話行為をしつつ、外からの刺激に触発されて次々と渡り歩く歩行と考えられた。	

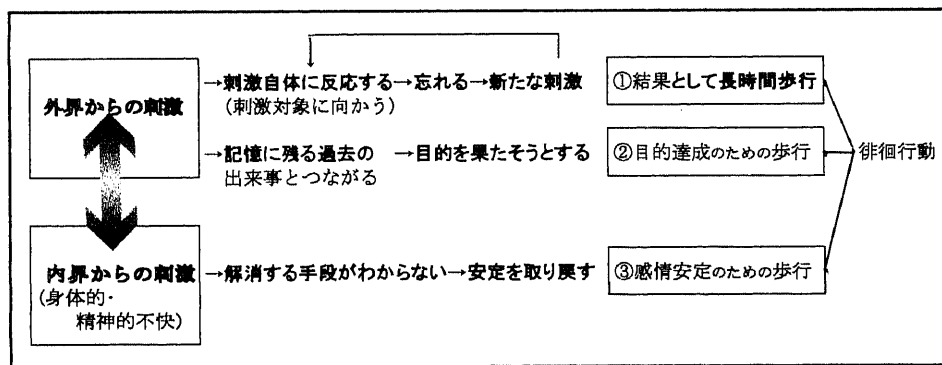


図 1. 徘徊行動が出現するまでの痴呆老人の認識プロセス（仮説モデル）

ステーションを一周した。その後布団を直し、さらに20分間に3回立ったりすわったりした。その意味を分析したところ、なじみの場を追われた不快感情を安定させるために歩行して発散させたと考えられた。そこで、こうした徘徊行動を「感情安定のための歩行」と命名した。事例Bは、夕食前に看護者に椅子にすわらせられたが、すくっと立ち上がって部屋を覗きながら廊下を歩き出した。どうしたのかと問いかけると「ちょっとうちまで・・・」と言い、ネームプレートを見ながら歩いていた。その意味を

分析したところ、自分の意志とは異なった扱いをされたため落ち着ける居場所を探すため過去の記憶とつながって居場所の探索行動をとったと考えられた。そこでこの徘徊行動を「目的達成のための歩行」と命名した。さらに「感情安定のための歩行」とも重なった。同様にC・D2事例の分析も行った。以上の分析過程より徘徊行動が出現するまでの認識のプロセスを仮説モデルとして示したものが図1である。痴呆老人への外界・内界からの刺激が相互に影響しながら行動パターンを形成し、徘徊行動に至ること

を表した。

## 考 察

高齢者が痴呆に至る過程には、老化や何らかの疾患による脳の器質性変化があり、その上に生活上の急激な変化が重なって発症すると考えられる。今回、4事例の痴呆に至る経緯をみたところ認知障害や失見当を基盤にしているとはいえ、過去の生活内容との関連が考えられた。高齢者にとっての一人暮らしは、日々の生活の繰り返しの中で食事の偏りや会話の減少、家族支援の希薄さをもたらす、身体と精神の健康を脅かす条件となりやすい。また、後期高齢期に入ってから入院や入所は、身体と精神機能の衰えた時期に不慣れな環境下で新しい出来事や人間関係に適応しなければならないことを意味している。我々が想像している以上に後期高齢者にとっての一人暮らし、入院・入所といった環境の変化は、精神の安定を脅かす経験と考えられた。

今回の研究で痴呆老人の徘徊行動を分析したところ、客観的に見ると意味のない行動が多いように感じられた。しかし、A・C・D氏のように他の部屋に入ったり、ベッドやイスに座り込むなど他者に迷惑が及ぶ状況は対象の生活過程との関連をみると、「ちょっとうちまで・・・」とか「晩御飯用意してない。」「寝床をととのえる」などかつての生活とつながった表現・行動がみられ、本人なりの目的を持っていると推察できた。

今回の対象では昼夜問わず歩き回るといった徘徊はみられなかったが、4事例の観察の結果、徘徊行動が出現する時の痴呆老人の認識のプロセスは図1のように3パターンに類別された。第一にはD氏にみられるような外界からの何らかの刺激がD氏の認識を刺激し過去の記憶とつながった行動を誘発する。しかし、そのことを正確に認知しているとはいえ、途中で異なる刺激があるとそれに引きずられて歩行を続け、結果的として長時間の歩行に至るパターンである。Thomas<sup>4)</sup>が提案したContinuous Wanderer(持続性徘徊者)の特徴と共通すると考えられた。第二には、A・B・C氏にみられた徘徊は、外界からの刺激が当人の過去の記憶に結びつき、目的を果たそうと歩行をしているようにみえるパターンである。他者からみると、辻褄があわないようでも本人なりに正当な理由がある目的達成のための歩行といえよう。また第三には、A氏にみられた感情安定のための歩行である。椅子を交換されたことが引き金となってA氏の精神的な変化、すなわち内界

からの不快感情を歩行によって緩和しようと行動しているようにみえるパターンである。仲村ら<sup>5)</sup>によっても同様の現象が説明されている。ただ、徘徊行動は外界・内界どちらかの刺激だけでおこるものではなく、両者の刺激がつながり認識の発展が生じるものと考えられる。従って、先の命名した徘徊行動のパターンも1人の痴呆性老人の中に重なって現れていることがわかる。

しかし、痴呆性老人の頭脳に生じている感情、認識を確認することは困難が多く、この類別は仮説の域をでないと考えられる。さらに観察を重ねてモデルの検証をしてゆく必要があるだろう。

徘徊している痴呆老人への看護を考えると、寝たきりや坐ったままの生活をしている高齢者と比較して歩行によって得られる刺激が大きく、身体的・精神的にも活動性が高まり一概に否定的な行動形態とは断定し難い。また、長時間の同一姿勢保持は生理的にも苦痛であるため、適度な歩行によって活動と休息のバランスのよい状態をつくり出しているとも考えられる。看護者は、痴呆老人の徘徊行動の特徴をみながら休息を促したり、危険のない環境下で歩行を見守るなどの援助をする必要があるだろう。

## ま と め

老人保健施設入所中の徘徊行動のある痴呆老人4人の観察を通して次のことが明らかとなった。

1. 高齢者の痴呆化のプロセスには1人暮らし・入院といったからだに心に不均衡をもたらすエピソードがみられた。
2. 徘徊は外界の刺激と内界からの不快刺激によって誘発されるものに大別されるが、両者の相互影響によって行動が多様化される。
3. 徘徊行動の特徴は痴呆老人のかつての仕事、生活習慣と関連しており、痴呆老人の生きてきた過程の把握の必要性が示唆された。

今回は少数の事例であり、一般的な徘徊行動を言うには限界があるが、痴呆老人の認識を生活過程と重ねて推測し、外界・内界からの刺激が快適と感じ、気持ちの安定につながるケアを提供することが重要であろう。

## 文 献

- 1) 池田久男他：痴呆患者と行動異常，ブレインナーシング，5(7)：17-21，1989。
- 2) Donna. L. Algate : Cognitive Discriminants Of Wandering Among Nursing Home Residents, Nursing

- Research, 41(2) : 78-81, 1992.
- 3) 小泉美佐子他：施設に入所した痴呆老人の徘徊行動の分析, 看護研究, 29(3) : 43-51, 1996.
- 4) David W. Thomas : Wandering : A Proposed Definition, Journal of Gerontological Nursing, 21(9) : 35-41, 1995.
- 5) 仲村禎夫他：徘徊, 老年期痴呆, 7 : 51-55, 1993.
- 6) 中島紀恵子他：ぼけと看護, 看護Mook, 20 : 9-15, 1986.

## **A Study On Wandering Behaviors And Nursing Care Among Senile Dementia Patients**

Kazuyo Kawashima, Minoru Mizukami, Matsumi Yamazaki, Naoko Seto,  
Wakako Akita, Sachiko Oba, Akane Isii